
丘の上で

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丘の上で

【Nコード】

N4261A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

暗い雰囲気短編です。

その日は、分類としては快晴であった。

雲ひとつない空。

しかし、色彩は虚ろで、水色の絵の具に灰色を混ぜて混ぜて、水で散々薄めたようだ。

陽の光はぼんやりとして人の目の直視を許す。

甚だ無気力な太陽は、海を望む小高い丘に申し訳程度の色を与えていた。

その丘を覆っているのは、やわらかい芝とシロツメクサ、ペンペン草、その他雑草。背の低いそれらが湿気た風にかすかに揺れる。犬だけが聞き取れるような葉ずれの音が波間に混じる。そしてその丘を半月状に取り巻くクヌギの林、その向こうに広がる不明瞭な水平線。海は穏やかだ。穏やか過ぎて死んでいるようだ。

丘の天辺、向かって立てばすっかり海が一望できる場所に、一枚の四角い石が立てられていた。人の腰くらいの高さ。

明らかに人工的なそれに、アルファベットが整然と掘り込まれていた。

『TETSUYA KUMASHIRO』

サキ、シャク、ザツ、シャツ。

一人の男がその丘を登ってくる。

くるぶしまでもない草々が黒い革靴に纏わりつき、踏みつけられる。

男が一步踏み出すごとに草の踏まれる音と、セロファンがパリパリとこすれあう音が立つ。男は右手を黒いGパンのポケットに突

っ込み、左手の、男性にしては細長く繊細な指で花束を握っていた。オレンジのリボンで飾り付けられた、チューリップや、カスミソウ達。太陽の無気力さなどどこ吹く風、燦然と自ら光を放つように、目の痛くなる色彩を周囲の風景に見せ付けていた。

やがて丘の天辺、あの四角い石の前まで来て、男は立ち止まった。海風にしては緩過ぎる無感動な風が男の前髪を揺らし、額の一片を晒させる。

男は目線だけを下げて、石を見た。にらみつけた。そしてその石の付け根に向けて、その花束を放り投げた。

セロファンと芝生が触れ合う。花束はほんの少しバウンドして、不自然な姿勢で落ち着いた。

男がその場にしゃがみ込む。

大きく開いた膝にそれぞれ肘を乗せて、男はその石をじっと見据えていた。

「こんなところにいたの」

黒いワンピースを着た女性が背後から男に近づいた。腕を組むような形で、右手で左の脇腹を、左手で右の脇腹を抱え込んでいた。二の腕がスラリと白かった。

「ああ」

男は振り向きもしなかった。同じ姿勢で、視線の先もそのまま。女が男の左隣まで来て、きれいに膝をそろえてしゃがんだ。石に刻まれた名前を見て、眉をしかめる。

「…何、これ、あの人のお墓？ 勝手に作ったの？」

「ああ」

「罪作りのこと、するのね」

男は石から芝に目を落とした。

「…悪いかよ」

男の声には、過剰なほどに怒気がこもっていた。女は予想しなかった男の言動に思わず身構えた。

「悪いかよ。ここに骨は無え。海は全部あの人につながってるって？ 海岸を見ればそこがあの人の墓だと？ 信じられるか、そんなこと」

男は、自分の頭を抱え込んだ。指と指の間から髪の毛がこぼれる。「俺はダメだ。俺は石がないとダメだ」

女は左手で自分の長い髪を掻いた。視線を、痛ましげに男から逸らす。

男は尚も続ける。

「…なあ、一体どこで死んでるんだよ。勝手にどこでもない場所へ行くなよ。俺を置いて、行くな…」

最後のほうは悲鳴に近い。

女は長く息を吐くと、立ち上がって海に向いた。

「あんたは特にかわいがられてたものね」

海。海。クヌギ林の向こうの、どうしようもなく広い海。

あの人の骨は海に撒かれた。

遺言だった。

遺言書には勿論のこと、往年になると常日頃から周囲にもらしていたから。

葬式は船の上で行われた。

俺の足の裏に、波に揺れる甲板の感触が蘇る。

ごく親しい人、といってもそれでも多くの人が集まった。

天寿を全うすればそれくらいのつながりはできるのだろうか。

俺は省みる。自分の今までを。

あの人と同じくらい生きて、こんなにたくさんの人に囲まれて死ぬことはまずないように思われた。

式の間、どんなに泣ける芝居よりもひっきりなしにすすり泣く音が聞こえ続けた。

あの人の奥さんは泣かなかった。

白髪を結び上げ、黒いバレッタで留めている。

確りと骨壺を胸に抱いて、きつと海を見続けていた。歳でわずかに曲がった背中。

そして、その骨壺の蓋を取る。

そこにあの人を誘うように風が吹いた。何つまみかがサラサラと空に融けていった。

奥さんが壺を傾ける。

意外にもバシャバシャと、それは海に沈んでいった。

俺は、自分の全てが茫漠と溶けていく気がした。

あの人は、もう一生掴めないところに行ってしまったのだ。

掴もうとしてもがいても、結んだ手には何も何も残りはしない。
い。

ザア、と海にわか騒がしくなる。

風が不穏に冷たくなる。

いつの間にか空は薄く重い雲に覆われていた。

世界が更に暗くなる。

男はまだ石の前にしゃがんでいた。

「でも、あの人はあんただけのものじゃないのよ」

女が呟いた。男を傷つけようとしてではない、むしろ思いやるような口調。

「お前に何が分かる!!」

男は叫んだ。草に向けて叫んだので、くぐもった響き。

それでも女は驚きと警戒で眉間を狭めさせた。

「…………悪かった。つたく、ガキじゃねえんだから」

「……………」

ただぼんやりしていただけの海面に、白い波が混じり始める。
男がにわかに立ち上がる。

「稽古に戻る」

ずんずん歩き始める。女はうろたえながらそれを追った。

男は夢の中のように、しかし決然と呟く。

「でもやっぱり、あの人以上の作品は演りたくない。あの人以上の演出は受けたくない」

「…あんただけじゃないのよ。…そんなこと、あんたには関係ないんだろうけど」

ふいに雨粒が頬にあたって、男はぎゅっと目を瞑った。

歩く男と女の肩の上に、髪の毛に、ぱたぱたと降り注ぐ。

男はますます歩幅を広げた。

草の上にも、クヌギの上にも、石の上にも、海の上にさえもそれは平等に降り注ぐ。

石に色の濃いドットが増えていく。

花束のセロファンの上にも。チューリップの上にも。

透明の球体を身にまとい、黄色いチューリップは更に瑞々しく輝いた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4261a/>

丘の上で

2010年10月15日22時15分発行